

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23560764

研究課題名(和文)近代の数寄空間の地域的特徴と文人たちの動向および煎茶文化の影響に関する研究

研究課題名(英文) Study on the regional feature of modern Japanese architecture and garden, and influences of writers and artists, and culture of SENCHA

研究代表者

矢ヶ崎 善太郎 (YAGASAKI, ZENTARO)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授

研究者番号：90314301

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：趣味的な行為の場として営まれた建築や庭園を数寄空間、また、文事にたずさわる人のかなで、特に詩文や書画などの文雅なことに従事した人を文人と定義し、近代において日本の各地域で行われた数寄空間の造営と文人たちのかかわりを明らかにした。文人たちの多くは煎茶を好み、煎茶を行うにふさわしい数寄空間を多く造営した。そこに展開した中国趣味的意匠の傾向が、近代和風建築あるいは近代庭園の成立に大きく関わっていた。

研究成果の概要(英文)：I defined the meaning of SUKI-KUKAN, and BUN-JIN who engaged in being the grace such as poetry or the painting. And I clarified a characteristics found in Japanese-style architecture, especially SUKIYA-style architecture and gardens constructed by BUN-JIN. Most of BUN-JIN liked SENCHA (green tea), and they constructed many SUKIYA-architecture and gardens suitable for their elegant pursuits. Chinese style design found in those architecture and gardens was concerned with the establishment of the modern Japanese-style architecture.

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：茶室 煎茶 文人 庭 近代和風 大工 数寄者 数寄空間

1. 研究開始当初の背景

幕末から近代にかけての時代は煎茶が興隆した時代であった。数寄者と称される有力な政・財界人のうちの一部や文人といわれる人たちは趣味的な生活の中に江戸後期以来の煎茶文化を受容した。すでに保守的な教養として受容されていた茶の湯に対して煎茶文化の革新性は、中国の文人たちの悠々自適な隠遁生活の境遇に人間的で自然な感情の発露の場を見出した有為な人たちに積極的に受け入れられたのである。

一方でこの時期は、近代的な数寄空間のスタイルが確立した時期にもあたる。したがってこのような一部の数寄者や文人たちの動向および煎茶文化の興隆と数寄空間の近代性の確立には双方に密接な関係があると考えられる。また、日本における煎茶文化の伝播の仕方や速度は、地理的な条件などによる地域性があると考えられ、それは数寄的な空間、あるいは近代和風建築の地域性の成立にも反映したものと想像される。

従来、数寄的な空間を考察するにあたってはもっぱら茶の湯、すなわち抹茶の文化との関係で語られることが常であった。また、近代和風建築においては煎茶文化の影響を視野に入れた研究がすでに行われているが、いまだ個別的な事例研究にとどまっている。

2. 研究の目的

趣味的な生活の場として営まれた風雅な建築と庭園からなる数寄空間の近代性に着目し、それが成立する過程において煎茶文化の影響とその地域的な特色を明らかにする。文人の動向をテーマにした本研究は、近代和風建築に煎茶文化の影響が浸透するプロセスを解明するものであり、これまでにない新しい視点を提示しているものである。

3. 研究の方法

『近世畸人伝』など文人の動向を知るための文献および煎茶書の収集と考察、いわゆる「煎茶図録」の収集と、図録から読み取れる建築および庭園の具体的な意匠の考察、遺構の調査と地域性を踏まえた特徴の考察。この三つを主な方法とする。

遺構の調査においては、全国でまとめられつつある近代和風建築調査の成果をふまえ、文人の足跡や煎茶文化の伝播の有無を見極めたうえで調査先を定め、効果的な調査を実施する。

4. 研究成果

文人といわれる人たちの動向を追うことによって、彼らが造営した数寄的な空間の特徴を検証し、近代の数寄空間の成立と文人たちの動向との関係を明らかにする目的で、主として九州・四国・中国・近畿・東海・関東・東北地方を中心に現地調査を実施、あわせて関連文献の収集と分析を行った。

日本の近代に成立した数寄的な空間につ

いて、既往の研究および調査報告等を悉皆的に調査し、所在地や写真などのほか特徴の基本データをリスト化した。

また、文人茶・煎茶に関する茶書の調査を行い(国立国会図書館、宮内庁書陵部ほか)、結果をデータベース化した。

日本で煎茶文化が伝播し隆盛した地域における文人たちの足跡をたどり、近代数寄空間遺構およびそれにかかわる建築遺構の調査を行い、図面の作成および写真撮影等による記録を作成し、意匠的特徴を解明するための基本資料の作成を実施した。例えば、東海地域においては熱海の塵外荘を調査し、近代を代表する数寄者の一人である野村得庵の煎茶趣味について考察した。また、長野県松代町など、文人を多く輩出した地域の建築的環境を調査した。鹿児島県鹿児島市の玉里邸にみる島津家に関するもの、島根県津和野町の堀家と煎茶趣味に関するもの、愛媛県大洲市の臥龍山荘における河内寅次郎と大工・中野寅雄に関するもの、新居浜市の廣瀬幸平と大工・八木甚兵衛に関するもの、島根県津和野町における煎茶文化に関するものなど、これまで未知であった文人と足跡と煎茶文化の伝播に関する史料、および建築の造営にかかわった大工の造営史料などの存在を明らかにすることができた。

中世末、侘び茶が大成され、侘び茶のための草庵茶室が成立したいっぽうで、書院造のなかにも草庵の思想・原理を援用するところみちなされ、武家の書院造とは異なる建築が創造された。そのような建築の革新は草庵風書院造ともいえる新たな建築を生みだした。いまではそれを数寄屋造と呼ぶ。数寄屋造は、近世を通じてさまざまな創意工夫が繰り返され、座敷の構成や材の流通が自由になった明治期以降、その最盛期を迎える。明治から昭和にかけての時代は、大工といった工匠たちの技も、日本建築史上もっとも充実した時代であった、といってもよい。

数寄屋といえば茶の湯の場、すなわち草庵の造形をもとにしていることは否定できない。

しかし近世中期以降になると、文雅の道に携わる、いわゆる文人といわれる人たちが、世の俗事をはなれて山野や清流の畔に隠棲する聖たちの境遇を理想とし、より自由で清新な環境をつかって自らの数寄的な生活を展開した。彼らが主として嗜んだのは煎茶であり、煎茶文化は幕末から昭和初期にかけて大流行する。煎茶文化の影響を受けた数寄屋の建築は、ここでまた新たな展開を見せ、やがて近代和風建築という新様式へと昇華していく。

「茶所、いづくにても膝を容るる所あらば煮るべし」(大枝流芳『青湾茶話』1756)とあるように、煎茶の場はこれといった設えを必要としない。あえていうならば「雑趣を専らとして新奇を出す」(同前)ことが肝要であり、清風を体感する自然な環境が求められ

たのである。

茶室や数寄屋をつくる根本となる理念とは何なのか。古典茶書のなかにそのヒントを探すと、それは例えば「茶湯者の覚悟十体の事 一、上をそそくに 下を律儀に 物のはずをちがわぬ様にすべし」(『山上宗二記』)といったことばにヒントがあるように思われる。「上を麤相に」すなわち見かけは何気なく、しかし「下を律儀に 物のはずをちがわぬ様にすべし」そのために道理をわきまえて、見えないところにこそ入念で実直な仕事をしなければならぬ。

また、「いかようなる座敷がよく候ぞと問われたれば 休 うめ木のおおい座敷がよく候と答う」(『茶話指月集』)とある。どのよう座敷がよい座敷なのかと問われた千利休は、「うめ木の多い座敷がよい」といったという。「うめ木」とは埋め木、すなわち「繕い」である。手を入れ、修理を繰り返し、繕ってまで使われつづけられる建築こそがよい建築である。またそうまでして使われつづけられてきた建築こそが尊い、ということを利用は悟っていたといえよう。修理や増築・改築、あるいは移築をくりかえしながらも維持され、由緒を重ねるごとに価値を高めていくことこそが日本の木造建築の特徴の根幹であるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

矢ヶ崎善太郎、画壇の住まい、近畿日本鉄道(株)近畿文化会発行『近畿文化』774号、2014、5-7

矢ヶ崎善太郎、旧島津氏玉里の茶室、月刊茶道誌『淡交』第68巻 第六号 通巻843号 特集「島津家の数寄風流」、2014、26-31

矢ヶ崎善太郎、近代の風流 西川一草亭をめぐって、京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター 庭園学講座20 「日本庭園のモダンとポストモダン」 2014、27-34

矢ヶ崎善太郎、茶室の建築と意匠、家具道具室内史学会誌『家具道具室内史』第5号、特集「茶と室内デザイン」、査読有り、2013、41-52

矢ヶ崎善太郎、棲宜荘と塵外荘 野村得庵の建築研究、2013 年度日本建築学会大会(北海道) 学術講演梗概集 建築歴史・意匠 2013、869-870

矢ヶ崎善太郎、伊集院兼常 - 数寄の生涯、月刊茶道誌『淡交』第67巻 第七号 通巻831号 2013、14-29

矢ヶ崎善太郎、「臥龍山荘の造営体制と大工・中野寅雄 京風の写しと伝播について」、2012 年度日本建築学会大会(東海) 学術講演梗概集 建築歴史・意匠、2012、7-8

矢ヶ崎善太郎、野村徳七(得庵)の建築について 近代数寄空間と煎茶趣味に関する

研究、2012 年度日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系 第52号 2012、749-752

矢ヶ崎善太郎、東山大茶会と東山茶会、京都造形芸術大学 庭園学講座 18 『庭園都市・京都 東山の庭園文化』2011、41-50

矢ヶ崎善太郎、Le début du jardin moderne au japon - Le style de Ueji (Ogawa Jihei, Vle du nom) et les personnes qui l'ont influence

(日本における近代庭園のはじまり 植治(七代目小川治兵衛)の作風と植治に影響をおよぼした人たち) Revue scientifique sur

la conception et l'aménagement de l'espace、ENSP de Versailles ヴェルサイユ国立高等ランドスケープ学校 電子ジャーナル『風景のデザイン』 査読有り、2012

http://www.projetsdepaysage.fr/fr/dossier_thematique

〔学会発表〕(計 5 件)

矢ヶ崎善太郎、棲宜荘と塵外荘 野村得庵の建築研究、日本建築学会大会(北海道) 学術講演会、2013

矢ヶ崎善太郎、茶の室内デザイン、家具道具室内学会、大会シンポジウム基調講演、2013

矢ヶ崎善太郎、京都南禅寺・岡崎界限の庭園と建築、日本庭園学会関西大会記念シンポジウム基調講演、2012、

矢ヶ崎善太郎、臥龍山荘の造営体制と大工・中野寅雄 「京風」の写しと伝播について、日本建築学会大会(東海) 学術講演会、2012

矢ヶ崎善太郎、野村徳七(得庵)の建築について - 近代数寄空間と煎茶趣味に関する研究、日本建築学会近畿支部研究発表会、2012

〔図書〕(計 4 件)

矢ヶ崎善太郎 他、『野村得庵の文化遺産、野村美術館学芸部編、思文閣出版、』2013、454

矢ヶ崎善太郎 他、講座 日本茶の湯全史 第三巻 近代、茶の湯文化学会編、思文閣出版、2013、323

矢ヶ崎善太郎、万代院 真如苑関西本部 数寄屋造り 伝統と祈りの精華、真如苑関西本部修築プロジェクト、2012、99

矢ヶ崎善太郎、水郷の数寄屋 臥龍山荘、愛媛県大洲市、企画・編集：株式会社エスピー・シー、2012、143

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

なし
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 矢ヶ崎善太郎
(YAGASAKI, Zentaro)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授

研究者番号：90314301

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：